

ベギン運動の理解における聖俗二分法の限界

一 運動の成立

十二世紀ないし十三世紀以降、北西ヨーロッパ諸都市で半聖半俗の生活を営む女性が増加した。いわゆるベギンである。

一二四三年頃記録されたマシュー・II パリスの年代記によれば、彼らは、純潔と生活の簡素を旨とする信仰の生活にはいつて、修道者を自称していたが、修道会に所属しておらず、また修道禁域を守っていたのでもなかった。⁽¹⁾ 現代の教会法の規定によって分類すれば、ベギンは修道女ではない。しかし、一二七四年頃、トウルネのギベールが嘆いたように、その生活様式ゆえ

上 條 敏 子

に彼女らは、「俗人と呼ぶべきか、修道女と呼ぶべきか断じ」がたかった。⁽²⁾

マシュー・II パリスは、ロンドン近郊のセント・II オールバンズ修道院の修道士であるが、述べられているのは大陸の出来事であった。in utroque sexu, set maxime in muliebri……Farunque numerus in brevi adeo multiplicabatur, ut in civitate Colonie et partibus adia centibus duo milia invenirentur この者たちは、最近とみに増えて、「ケルン市とその周辺で二〇〇〇人」を数える、と年代記にはある。⁽³⁾

中世ヨーロッパの都市は、現代の基準からすれば一般に驚く程小さい。中世ケルン市は、アルプス以北の

ヨーロッパでは十指に入る大都市であったが、その人口は、十三世紀初頭で推定一万五〇〇〇人程度、一二〇〇年頃で三万七〇〇〇人にすぎなかった。⁽⁴⁾したがって、二〇〇〇人という数字は、市の周辺まで含めていることを考えても、人口に対して無視できない比率を示していたと考えられる。

マシューも、この風潮に強い印象をもったらしく、その後も何度か同じ問題をとりあげた。しかし、一二五〇年頃の記述では、彼らがベギノもしくはベギナと呼ばれる所以も、また、どのようにして現れたのかも解らないとある。

ただし、マシューは、この生活の実践者は「男女にあったが殊に女性に多かった」*in uxorque sexu, set maxime in muliebri*としており、運動の成立を、当時の社会、経済状況との関連においてとらえようとするならば、その意義を問うことからはじめなければならぬ。⁽⁵⁾

二 語源についての研究とその成果

今日までの研究でも、ベギンの名称が、何に由来するのかは確定していないが、これまでに、有力視された説明には、四説ある。⁽⁶⁾

(一) 聖ベッガ *Begga* (六五九年没) 由来説。聖ベッガ由来説は、十五世紀の記録に既にみえるが、同じ史料の古い写本には記載がないことから後代に形成された伝説を根拠と言うべきであろう。また、ベッガが生きた時代から最初のベギンの登場までに数世紀のタイムラグがある点に説明がつかず、聖ベッガがベギン運動に果たした現実的な役割を証拠だてることはできない。

(二) ランベール *Lambert* (一一七七年没) 由来説。ランベールは、十二世紀のリエージュの改革派司祭であり、ルリベグ *le Begue* (どもりの意とも) のあだ名があった。また、ランベールがベギン会の創始者であるとする伝承は古くからあった。ベギンの名称が彼のあだ名に由来するとする説の弱点は、ランベールは

初期の史料でル・ベークと呼ばれていないことである。従って論理的には、ランペールのル・ベークのあだ名の方が、ベギンの名称に由来する可能性がある。

(三) 異端アルビジ ヲ 派 Albigenis 派生説。ベルギーのヴァン・ミエロが提起した仮説であり、現在最有力視されているが、音韻変化的には疑わしい。

(四) ベージュ bege 由来説。中世においては、ベネディクト会の修道士を黒の修道士とよぶなど、一般民衆が衣の色により修道士を見分け、通称とすることは一般的であった。ベージュ由来説は、ベギンの名称も彼女らがまとった灰褐色の衣の色を言うフランス語から転訛したとする。

語源論争は、現在でも完全には決着がついていないという意味では、成果がなかったとも言えるが、いわゆるベギン会の出発点には一人の創設者が見あたらないことが確認されたこと自体は「成果」であった。現代の研究者は、ベギン会の起点が組織としての「会」にあるという発想を放棄し、その初期における現象形態は自発的運動であったと理解し、これをベギン運動

と呼ぶ。

グレーヴエンによれば、運動は一二〇七年頃リエージュ司教区ではじまり、やがてネーデルラント一帯、ラインラント、さらにフランス、スイス、そして中欧へと波及した。⁽⁷⁾ただし、広く定義をとって、ムリエールス・レリギオザエ mulieres religiosae と呼ばれた聖女をベギンに含めることが許されるなら、ベギン運動の歴史は少なくとも十二世紀末まで溯る。また、認可された修道会に連なることなく俗人が宗教活動を行うこと、と定義する場合には、フミリアーティなど南ヨーロッパの動向も含まれることになる。さらに、名称の共通性を基準にする場合には、十三世紀末から十四世紀はじめにかけて南フランス、イタリアに広まったフランシスコ会第三会の動向も北ヨーロッパの現象と一括されることになる。⁽⁸⁾しかし、北方言語ではベギンは女性だけをいい男性はベガルドとよばれる習慣であったのに対して、南のベギンは男性を含んだ。一般にベギン運動は地域差が大きく、ことに南方のベギンは、北方のベギンと名称以外の共通点をもたなかつ

たとして、区別することが慣例となっている。⁽⁹⁾ それゆえ、本論でも、北方の動向に問題を限定して論じることが許されよう。

三 初期の社会経済史的解釈

北西ヨーロッパのベギン会の研究には、都市史研究者の側と宗教史研究者の側からの二つの流れがある。近年でこそ、教皇グレゴリウス七世(在位一〇七三年—一〇八五年)期にはじまる教会改革運動の一翼を担うものとして運動を位置づける研究が支配的であるが、十九世紀末における研究者の関心は、それとは全く別のところにあった。

周辺諸国に先駆けていち早く歴史学の方法を確立したドイツでは、十九世紀半ばまでに、都市史研究者による優れた個別研究が行われている。ことに、シュトラスブルク市についての一八五八年のシュミットの『シュトラスブルクのベギネンハウス』は、都市文書史料の丹念な分析から、七〇館をこえるベギネンハウス Beginenhaus を確認し、古典的研究となった。⁽¹⁰⁾

まず、シュミットの主張はつぎのようである。中世の社会環境における貧しい女性の運命は、特に都市において、多くの場合きわめて痛ましかった。この状況の下で、「神の家」Godshuis がキリスト教の善行として、「不幸な構われない階層」の人々のために寄進され、「神の家」の住人たる女性がベギンとよばれた。⁽¹¹⁾

シュミットのこの記述をもとに、「神の家」の社会経済史的解釈を試みたのがカール・ヒューヒャーである。彼の考え方は、『中世の女性問題』に示されている。⁽¹²⁾

それによれば、中世の女性問題 Frauenfrage の「根源」には、適齢期男子人口に対して女子人口が相対的に過剰である事実があった。ことに都市においては成人女性の人口が男性人口を一割程度も上回っていた。これは、フェーデ(「私闘」、公的権威による裁判をまたずに私的制裁を行う慣習を言う)、市民間の争い、商用旅行など中世都市の男性の生活は危険をとまない、ペストの犠牲者も男性が多かったからである。また、男性は生活も享乐的で肉体労働による過労も大きかった。さらに、聖職者を含め、生涯を独身で過ごす者が

相当あった。そのために、男性と結婚して家庭に入ることの出来ない女性が多数存在した。⁽¹³⁾

ビュッヒャーはここに中世の女性の問題の根源を見る。ことに問題は、上層の女性にふさわしい職業がなかったこと、そして下層の单身女性の生活がきわめて不安定で身を持ち崩しやすかったことである。もとはと言えば女子人口の余剰に発するこの二つの問題にこたえたのが修道院、富裕な女性の共同生活の家（ザンメルング）、そして前述の「神の家」であった。ザンメルングはこの世の喧噪を逃れて静穏な生活を送ることを望む富裕な女性の共同生活の家であったが、神の家は、貧しい独身女性と寡婦のための施設であった。⁽¹⁴⁾ ビュッヒャーによる「神の家」（ビュッヒャーにとってはベギネンハウスと同義）の位置付けはおおよそ以上のように要約しうる。

マシューの年代記にもあるように、半聖半俗の生活の選択は殊に女性に多くみられたから、ベギネンハウスの成立を当時の女性がおかれていた社会状況との関連においてとらえようとするのもゆえないことではな

い。しかし人口動態から出発して、都市の单身女性の生活苦を説き明かし、ベギネンハウスの貧民救済機能を強調する説明には、思いがけない弱点もある。ビュッヒャー説は少なくとも二つの方向から挑戦されている。

*

第一の批判は中世都市における女子人口過剰説に向けられる。都市における女子人口は一般に男子人口を上回ったとする見解は依然、広く流布しているし、全く根拠がないわけではない。⁽¹⁵⁾

しかし、中世都市において女子人口が男子人口を著しく上回ったという説明に対して、最近の研究は、反例をあげることに成功した。⁽¹⁶⁾ 近代以前には、人口統計の資料とすることをあらかじめ意図した人口調査は一般的でなく、中世都市の人口構成について直接のデータは、戦時下における籠城人口の調査もしくは、租税台帳にほぼ限られている。史料が限定されているという問題を乗り越えることは今後も難しいだろう。し

かし、ビュッヒャー説を修正する方向に学界の見解が動きつつあることは確かである。ドイツ中世都市史の碩学エンネンの近著は、中世都市においては、女子人口が男子人口を上回ったと決めることも、逆に男子人口の相対的過剰を仮定することもできないとする見解を示している。⁽¹⁷⁾

また、都市における女子人口の相対的過剰を認める場合にも、男子の高い死亡率にその原因を求める研究者は少ない。単身者は、男女の人口が均衡した状態でも増加しうる。ことに人口移動の影響は無視できない。⁽¹⁸⁾

モンス市(北フランス)のベギン会を十三、四世紀について検討した最近の研究によれば、同市では、設立者の知られるコンヴェント二十三のうち、半分以上にあたる十四が都市に拠点をもたない家門による設立であった。⁽¹⁹⁾ やや時代が後になるが、ベルギーでは、一五九八年から一七八〇年にかけて、レーヴェンのクレイネルベギンホフ(ベギンホフは南ネーデルラントに固有の施設)に居住したベギンの四十三%は市外出身者、一六九一年のトゥルネのマドレーヌルベギンホフ

では、四十八%が市外の生まれだった。市外出身者の占める比率は、スイントロトライデン(一七八〇年、六十二%)、ディースト(一五七〇年、八十二%)、ヘントのスイントリエリザベートルベギンホフ(十八世紀末、八十四%)、ホーヒストラーテン(二六一九年、九十五%)では、さらに高い。⁽²⁰⁾

初期の都市史研究には、都市を周辺領域から切り離された閉鎖的空間としてとらえたものが少なくない。ベギン運動も、ベギンの家が都市に立地していたがために、何か周辺の農業地帯からは切り離された動向のように分析されてきた。しかし、そう考えることはおそらく誤りであろう。実際には、十二世紀にはじまり、前近代の終わりにいたるまで、えいえいと続く農村から都市への女子人口の移動があったからである。そして、女子人口の相対的優越が人口移動の結果であったと考えることが許されるなら、都市の女子人口過剰ゆえにベギネンハウスが設置されたとする説明は、原因と結果をとり違えていることになる。ベギネンハウスが、都市に流入する女子人口を吸引していたのであれ

ば、都市の男性の命をかけた「危険な」生活は、ベギンの増加とあまり関係がないように思われるのである。

第二の批判は、ベギネンハウスが貧民救済を目的として寄進されたという説明に向けられる。ベギンは果たして、都市の下層民だったのか、が問いなおされているのである。ベギネンハウスは経済的に困窮する女性を墮落からまもるために寄進されたとする主張の前提は、ベギネンハウスに収容されたベギンが一義的には都市の貧困層であった、という理解にある。近年の実証研究はしかし、初期のベギンの出身階層について、むしろ逆の事実を指摘する傾向にある。ベギンは都市の下層民だったのではない、初期のベギンには下層の貴族と富裕な市民層出身の女性がむしろ多かったとされるのである。⁽²¹⁾ ビュッヒャーら、十九世紀末の社会経済史家は、貧しいベギンという史料中の表現を、出身階層の卑しさ、経済的な困窮を示すものと解釈していた。しかし、中世における貧困の意味は多義的であり、ことにキリスト教文化には、貧民を、財産も定職もなく裸足で遍歴したキリストになぞらえる伝統が

あった。⁽²²⁾ このため、極端な例をとれば、生活を安定させるために財産を寄進して宗教団体の一員となることも「貧しい」生活に入ることを意味した。つまり、宗教的な含意をもって用いられる「貧しさ」は、物質的保证と必ずしも相いれないものではなかった。

以上のような中世の語法を踏まえるなら、ベギン運動の成立には、貧困の蔓延とは別の脈絡からの説明があることになる。

四 宗教史家による再解釈

初期のベギンは、清貧の理念に強く影響されて、物質的な富をあえて自ら放棄した、こう主張したのは、グルントマンである。グルントマンは、初期シトー会修道女が野に出て働いた例があることから、シトー会修道女や初期ベギンを動機づけていたのが宗教的熱意であることは疑い得ないと考えた。そして、この熱意を疑うことは時代を読み損なうことであると述べる。

初期のベギンとしてグルントマンの念頭にあったのが、ニヴェル生まれの聖女オイグニースのマリア（一二一

三年没)である。伝記によれば、マリアは、富裕な両親の下に生まれて結婚して夫もあつたが、財産を貧民に分与して癩病者の看護にあたつた。「不当に得られた富を放棄した」のである。ほぼ同時代人にはアッシジのフランチェスコもあることから、グルントマンは、十三世紀の宗教運動のきわだった特徴として「清貧」を前面におしだし、ベギン運動は、下層民の社会的抗議の運動ではなく、富裕な都市民が自ら富を放棄する主体的運動であつた、と議論した⁽²³⁾。

また、グルントマンは、ベギネンハウスについても、「貧しく必要のある女性にアジュールを与えることを望みもしなかつたしできもしなかつた⁽²⁴⁾」とし、その意義を女子修道院不足を補うものと位置づけている。十二世紀以来のプレモントレ会、シトー会そして托鉢修道会による活発な女子修道院建設をもつてしても、敬虔な生活を望む女性をすべて受け入れることはできなかったとグルントマンは言う⁽²⁵⁾。グルントマンの議論の特徴は、初期ベギンの①出身階層の高さと、②宗教願望の強さ、そして③女子修道院の収容力の相対的不足、

を重視する点にある。

ベギンを彩る明白な宗教色、初期ベギンの出自を考えると、ベギネンハウスの誕生を十三世紀の女子修道院の収容能力の限界と関連づける材料はそろっている。グルントマンの理解は、学界に強いインパクトを与え、ノイマン、マクドンネルなどその後の研究者の概念的枠組みを支配してきた⁽²⁶⁾。最近では、エルムが、ベギン出現の背景に女子修道院の問題をみてベギネントウム——グルントマンの用いた概念で、宗教運動のうち修道院形成に至らなかつたすべての動向を含む——の起源を当時の教会情勢に辿っている⁽²⁷⁾。

ベギン運動の前提として、エルムが想起するのは、遍歴説教師のまわりに群れをなした女たちであり、プレモントレ会修道院が収容したと伝えられる一万人の女たちであり、定員の三倍に達したといわれるシトー会女子修道院の女たちである。彼女等と対にして彼が思い出すのは、十二、三世紀に女子修道院制度の発展を妨げたであろう教会立法である⁽²⁸⁾。

一一四一年、プレモントレ会総会は、併設女子修道

院の廃止を決議し、シトー会も後に、同様の姿勢で女子修道院にのぞむようになった。ところが、一二二五年のラテラノ第四公会議は、新しい修道会の結成を禁止したから、独自の女子修道会結成の可能性は閉ざされた。エルムは、これら、一連の措置をベギネントウム成立と関連づけている。⁽²⁹⁾

グルントマンとエルムの示す見取図は、実証的な裏付けを欠くものの当時の教会情勢に目を向けさせた点、評価される。教会情勢を視野にいれることで時代背景への理解が深まるからである。しかし、課題も残されている。

まず、立法が現実はどう施行され、どのような現実的効果をもったのか、修道会が女子修道院の併設を禁止するに至る経過はどうであったのかについての検討は弱い。近年では、シュタイン、フリードなどにより、シトー会決議がさしたる実行力をもたなかったことが指摘されており、実態を踏まえた議論が必要であろう。⁽³⁰⁾

また、修道会から女性が排除されなければならなかった理由の説明も不十分に感じられる。エルムは、修

道士にとって女性の修道願望にこたえず、同時に自分達自身の修道生活——その本質は、礼拝と禁欲——を守ることに困難であったと述べる。しかし、ここでエルムの議論は、宙にういたようなかんじをうける。女性たちをベギン運動へとむかわせた欲求がなにに根差していたのが、全くみえなくなるからである。

エルムの限界は、女子修道院とベギネンハウスに共通する問題とそうでない問題を見落としていることである。そのためにベギン運動独自の指向については何も語られずにおわる。グルントマンに戻って、答えを探しても無駄である。グルントマンは、「もともと共通性をもった運動が、教皇庁、修道会、女性の共同体自身の措置と決定により、多様な組織形態へと形を整えてゆき、固有の発展をとげる」と整理していたからである。⁽³¹⁾ また、グルントマンは、ベギン運動の特徴は、修道院史、異端史と一括して論じる方がよくわかる、との立場に立ち、ベギン運動をそれとして論じる必要を認めていない。その結果、時代の精神風潮として清貧への愛が指摘されるにとどまっている。

そこで、つぎに、修道女とベギンの生活と義務を簡単に概観し、最後に、ベギン増加の問題に戻りたい。

五 ベギン運動の現象形態

ノイマンによれば、ベギンの生活は五つの基本類型にわけられる。

第一の類型は、内面の強い信仰と、私的領域で行われる宗教的実践のほかには一般と変わることはない生活を続ける場合である。第一類型はことに初期の現象であるが、女中、家政婦、洗濯女などの仕事を続けることも可能であるため、誰でも実践できた。

第二類型は、親ないし親類縁者の家共同体に包摂されている場合であり、やはり初期に限定された。

第三類型では、それまでの生活との訣別がおこる。

農村共同体を離れて都市に移住して、家を購入ないし、賃貸した場合、都市に最小規模の共同体を形成した場合がこれにあたる。

第四類型は、おおむね第三類型の共同体を出発点として三人以上の女性による共同体形成にいたった場合

である。共同体形成のイニシアティブは、女性たちの間から生まれることもあれば、外部からの寄進行為をきっかけとする場合もあった。この種の共同体はいずれの年代にもみられ、ベギン *Beginnenum* を特徴づけている。

第五類型は、後期の現象であり、第四類型が主に十五世紀に発展して律修修道院 *Ordenskonvent* となった場合である。修道会則 *Ordensregel* をうけいれた⁽³²⁾場合のベギン共同体と言うことになる。

ノイマンの五つの類型は、世俗に近い生活から修道院生活まで段階的に分けられている。それぞれの類型を修道院生活と比較するということになれば、最初の方にあげられた類型ほど、修道院生活から遠く、最後の方にあげられた類型ほど修道院に近いと考えられる。この類型だけを見ると、ベギン運動が修道院形成を目指しながらそこに到達しなかった運動であるかの印象がもたれる。

しかし、そう考えることは、必ずしも正しくない。共住律修生活への接近が、修道者の最終目標であると

いう思考は、ある種の価値観の反映である。ベギン運動は、その現象形態から考えて、世俗からの離脱を目指していたとは考えにくい。

ベギンが求めたものが何であったか、を理解するためには、ベギン運動の到達点とも言えるベギンホフ *beginnhof* における女性たちの生活形態を見ることが有効であろう。⁽³³⁾

ベギンホフとは、ベギンとしての生活を選択した女性のための居住空間であり、ベルギー、オランダを中心に十三世紀に設置された。このベギンホフは、ブラバント地方、フランドル地方などに残っており、ベルギーでは現在も少数ながら古来の生活様式を守ってベギンとして生活する女性がある。彼女らは、ヴェールをつけ、黒い修道女風の衣装をまとい、素人目には修道女と区別がつきにくい。また、朝夕に開閉される門によって外界から遮断される領域に居住した点でも、修道女との類似性を認め得ないわけではない。

しかし、ベギンホフ制度についての基本的研究を著したフィリップセンによれば、「修道院に入ることはベ

ギンの生活に入ることとは全く異なっていた」⁽³⁴⁾。

両者の最もわかりやすい相違は、誓願の内容と拘束力にみられる。まず、修道女は、清貧、従順、純潔を誓う。そして、一度たてた誓願は生涯にわたる法的拘束力を持ち、誓いを破れば教会法による処罰の対象になった。他方、ベギンの誓願は、従順、純潔を含む点では修道女と共通しているが、個人として無所有になる必要はなく、簡素な生活を営むことだけを求められた。また、誓願はベギンホフに居住する期間のみ拘束力をもつものとされた。したがって、ベギンになっても財産管理権は失われず、誓願を撤回する可能性が残されていることになる。文字どおりにとれば、ベギンホフからであれば結婚もできたことになる。もっとも、実際には、誓いを破ることは犯罪ではなかったが醜聞であったため、一度ベギンとしてヴェールをつけた女性が外の生活に戻ることは少なかったという。⁽³⁵⁾

十八世紀の教会人に言わせれば、ベルギー人の「自由を好む国民性は、強制されるよりも導かれることを好む」のであり、ベギンホフも、「ベルギー女性の、こ

とさら誓願をたてるより進んで成す気風」に相應しいということになる。その気風とは「純潔の誓いをたてるより、純潔を行うことを好む」ことであるとされる。

つまり、同じことを行うにも、外的強制によらず、意志によるという位置づけであったことがわかる。考えようによれば誓願をたてても守れないときは守れないのだから、形式より実践を重んじたこの主張にも一理あろう。他方、清貧を誓わないことについても、財産を一度にすっかり放棄してしまうのでなく、手元において有効に利用するのだとされている⁽³⁶⁾。

では、日課からみるとどうであろうか。生活様式の点では、修道院の存在意義が「祈り」に集約されるとすればベギンの生活は、「労働と祈り」の二語に集約され、労働と祈りに等分ないし、労働の方に大きな比重があった⁽³⁷⁾。

また、修道院では寝食を共にするなど共同生活の色調が強いのに対して、ベギンホフ内の生活は多様である。ベギンホフには、共同生活が行われるコンヴェントと、個人生活が保たれる邸宅が混在しており、いず

れかを選択する余地があったからである。また、個人が生計維持手段に幅があることもベギンホフの特徴である。ベギンホフには年金生活者はまれであり、大部分は、機織りとそれに付随する諸工程、手芸、刺繍、糸紡ぎ、レース編み、野菜売り、収穫の手伝い、洗濯、アイロンかけ等なんらかの労働を生活の糧としていた⁽³⁸⁾。ベギン運動は、多様な現象形態をとったが、そのひとつの到達点とも言えるベギンホフを特徴づけるのは生活形態と生計手段を限定しない雑居性なのである。

六 ベギンの地位を支える論理

では、ベギンホフにおける雑多な生活の混在を許容し、かつ結びあわせていた原則は何だったのだろうか。オイグニースのマリア伝の作者でありベギン運動の擁護者であったヴィトリのヤコブの言葉をてがかりに考えてみたい。

俗世を捨て法的に律修道士身分に移行した者ばかりでなく、福音の戒にしたがって主に仕え、唯

一にして至高の修道院長の下に生きるすべてのキリスト教徒は、レグラーレス *regulares* といひ得る。在俗の共住聖職者、司祭は、彼らの規則をもち、独自の秩序と制度をまもる。寡婦もしかり、また乙女もしかり。既婚者のオルドもしかり。騎士、商人、農民、そして手工業者、その他の従者は、多種多様な互いに異なる固有の律 *regulas* をもち、生来のさまざまな職能に應じて主に献身する。異なる職能、メンバーはそれぞれに固有の多彩な仕事を果たし、キリストを頭とする教会という身体の手となり足となる⁽³⁹⁾。

修道院に入るまでもない、福音の戒めをまもるなら、どのような職能にあっても、修道生活をしていることになるのだよ、とヤコブは説いていたのである。現在ではあまりにもよく知られた中世身分論によれば、社会は祈る者、戦う者、働く者に区分されており、祈る者が最も高く位置づけられていた。⁽⁴⁰⁾そして、やはりよく知られた労働論によれば、中世世界における労働は、

楽園追放の結果人類に課せられた苦役であるとされていた。ヤコブの場合も、それぞれの職業の間の垣根を完全に取り払っているわけではないが、労働を苦役として卑しめていないことも注目される。ヤコブは、福音の掟を律とする生活が、修道士の生活に匹敵することを暗示する。そして、生計手段は何であれ、福音の戒にしたがう意志さえあれば、宗教的に価値のある生活は可能であるよ、と説くのである。

一般には、こうした考え方がでてくるのは、もっと後のことと考えられている。

ヴェーバーによれば、「修道士的禁欲を世俗的道徳よりも高く考えたりするのでなく、神によるこぼれる生活を営むための手段はただ一つ、各人の生活上の地位から生じる世俗的義務の遂行であって、これこそが神から与えられた『召命』*Beruf*」にほかならぬ⁽⁴¹⁾という思想の展開をみたのは、ルターが最初であり、ルター以前には、*Beruf* 概念の語義の萌芽はドイツ神祕家のひとり（タウラーが想定されている）のほかに認めることができないことになっている。また、語

義と同様、その思想も宗教改革の新たな産物だったとされる。⁽⁴²⁾

確かに、ヤコブの思想には、〈Berni〉概念こそ用いられていない。しかし、修道生活の概念を広く適用することによって、ルターにかなり近い考え方を示しており、俗人に職業生活を通じた救いの確証を与える道を開いていたと考えられる。

ケルン市の人口規模を考える時、マシューの記録した自称修道者の増加は、爆発的なものであったという印象をうける。では、ことさら世俗内修道生活の実践に人々を駆りたてたものは何なのだろうか、と考えるを進めると、十三世紀に特別のものとも思われない單身者の存在、女子修道院の限定された収容力などによって、説明のつかない問題が残る。いずれの要因を重視するにせよ、ベギン運動は、結婚生活と修道院生活のネガ、余りものであるということになり、一世を風靡した流行現象には別の推進要因が必要であると思われるのである。その推進要因は、在俗の修道生活の意味をポジティブに転換させる発想であったのではない

か。ヴィトリのヤコブにみる思潮が、救われるものなら救われたいという民衆の潜在的願望と出会ったところに、ベギン運動の吸引力は生まれた。

しかし、聖でも俗でもないものを追及したベギン運動は、聖か俗かの二分法の適用を推進する教会法によっていずれ排除の対象となる。一三一年のウィエンヌ公会議は、ベギンを「誰に対しても服従を誓っておらず、財産を放棄しておらず、認可された修道会則に従っておらず、従って、どのようにしても律修修道女とは考えられない」ものと明確に宣言して、半聖半俗の地位の廃止と特権の剝奪及び共同体の解散を命じるのである。⁽⁴³⁾

- (1) Matthew Paris, *Chronica Majora*, iv, 278; v, 194, *Historia Angliae*, ii, 476; iii, 93; *Abbreviatio Chronicorum*, III, 288, 318; SOUTHERN, R. W., *Western Society and the Church in the Middle Ages*, 1970, pp. 319-320; McDONNELL, E. W., *The Beguines and Beghards in Medieval Culture*, 1969, pp. 432, 123, 249. ヴィンチー = パリスについては

VAUGHAN, R., Matthew Paris, 1979; Id., *Chronicles of Matthew Paris: monastic life in the thirteenth century*, 1984.

(2) *Collectio de scandalis Ecclesiae*, ed. I. DÖLLINGER, Beiträge zur politischen Kirchlichen und Cultur-Geschichte, t. 3, Vienne, 1882, p. 197.

(3) SOUTHERN, R. W., op. cit., ibid.

(4) SOUTHERN, R. W., op. cit., pp. 322-323. アーセンによればケルン市のベギン用コンヴェントの収容力は、一二五〇年頃で六、七〇人、一三〇〇年頃で五七五人であり、年代記の数字とは大きな開きがある。アーセンは、この開きを年代記の数字は不正確なためとして説明するが、アーセンの議論もあてにならない。ベギンを非就労人口とみなした上で、非就労人口としては市の負担限度を越えるという理由で、「ありえない」数字と判断したからである。ベギンになっても仕事をやめる必要はなかったから、この仮定はあたらない。また、アーセンの計算では、コンヴェントに居住しながらベギンが勘定にはうつらない。ASEN, J. Die Beginen in Köln. in: *Annalen des Historische Vereins für den Niederrhein*, III (1927), p. 114 ff. ライン流域諸都市におけるベギンの対人口比は、NEUMANN, E. G., *Rheinisches Beginen-und Begar-*

denwesen: Ein Mainzer Beitrag zur religiösen Bewegung am Rhein, 1969, pp. 75-78.

(5) 中世のベギンについて、拙稿「中世のベギン—敬虔な女たちの軌跡—」『一橋研究』第一五巻第三号（一九九〇年一〇月）、「ハー—〇二頁、池上俊一「女性のために」『クリオ』創刊号、一九八六年十一月、二十四—四〇頁、国府田武「ベルギー中世のベギン運動」『中世の修道制』創文社、一九九一年、二七一—二九一頁。北西ヨーロッパのベギン運動についての基本的文献は、McDONNELL, E. W., *The Begines and Beghards in Medieval Culture: with special emphasis on the Belgian Scene*, 1954. トランドネル以後の文献は、ELM, K., Be (g) hinen, in: *Lexikon des Mittelalters*, vol. 1, 1980, cols. 1799-1800; Id. Die Stellung der Frau in Ordenswesen, Semi religiosentum und Häreise zur Zeit der heiligen Elisabeth, in: *Sancti Elisabeth. Fürstin, Dienerin, Heilige*, exh. cat, 1981, pp. 7-28 を参照せられた。ベギン・ベガルダの異端について、LERNER, R., *The Heresy of the Free Spirit in the Later Middle Ages*, 1972. 樺山紘一「自由心霊派の異端」(合田雄次「中村賢二郎編『異端運動の研究』京都大学人文科学研究所、一九七四年所収)」、樺山紘一『ロシアンク世界の思想像』

- 史教書店'一九七六年)' GRUNDMANN, H., *Kelzer-geschichte des Mittelalters*, 1963 (邦訳'今昔國権館'ハントマン『中世異議史』創文社'一九七四年'第十一章「十四世紀における異議的なキリ派とバグナド派」八四—一〇三頁)。
- (9) 離叛論争ヒツトザ' NIMAL, H., *Les Béguines*, 1908, pp. 1-39; GREVEN, J., *Die Anfänge der Beginen*, 1912, pp. 1-26; McDONNELL, E. W., op. cit., pp. 430-438, MENS, A., *Les beguines et les begards dans le cadre de la culture medieval*. A propos d'un livre recent. in: *Le moyen âge* 64 (1958), pp. 305-315; PHILIPPEN, L. J. M., *De Begijnhoven: Oorsprong, Geschiedenis Inrichting*, 1918, pp. 1-40; NÜBEL, O., *Mittelalterliche Beginnend und sozialisierungen in den Niederlanden*, 1970, pp. 1-14.
- (10) GREVEN, J., op. cit., pp. 50-52, 67, 136-138, 158, 189, 204-216.
- (11) MENS, A., op. cit., pp. 273-322.
- (12) McDONNELL, E., op. cit., pp. 433-444 附G'キハニツトザ' MANSELL, R., trs. by DUVERNOY, J., *Spirituels et Béguines du Midi*, 1989 (*Spirituali et beguini in Provenza*, 1959.); WALTERFIELD, W. L., EVANS, A. P., *Heresies of the High Middle Ages*: *Records of Western High Middle Ages*, 1969, pp. 54-55, 411-439.
- (13) SCHMIDT, C., *Strassburger Beginnhäuser im Mittelalter*, in: *Alsacia, Beiträge zur elsässischen Geschichte, Sage, Sitt und Sprache*, hrs. von A. Stöber, 1858-1861, pp. 149-248.
- (14) SCHMIDT, C., op. cit., pp. 151-2.
- (15) BÜCHER, K., *Die Frauenfrage im Mittelalter*, 1882.
- (16) BÜCHER, K., op. cit., pp. 1-8.
- (17) BÜCHER, K., op. cit., pp. 18-31.
- (18) 女子人口増減論 Van de WOUDE, A. M., "Demografische ontwikkeling van de Noordelijke Nederlande 1500-1800", in: *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, vol. 5, Haarlem, 1980, pp. 102-106, Little, K., *Religious Poverty and the Profit Economy in Medieval Europe*, pp. 28-29; SIMONS, W., *The Beguine Movement in the Southern Low Countries: A Reassessment*, in: *Bulletin de l' Institut Historique Belge de Rome/Bulletin van het Belgisch Historische Instituut te Rome* 59 (1989), pp. 71-72.
- (19) SCHULER, P. J., *Die Bevölkerungsstruktur der Stadt Freiburg im Breisgau im Spätmittelalter*.

- Möglichkeiten und Grenzen einer quantitativen Quellenanalyse, in: W. EHBRECHT, (ed.), *Voraussetzungen und Methoden geschichtlicher Stadtforschung*, 1979. フライブルグ・イム・ブライヌスガウ市の一四九六年から一四九九年までの対トルコ戦臨時税の帳簿分析による。聖職者と大学関係者をのぞいた同市の住民構成は男子一七〇三人、女子一六五三人、性別不明九九人であった。
- (17) ENNEN, E., trs. by E. JEPHCOTT, *The Medieval Women*, 1989. (*Frauen im Mittelalter*, 1984), pp. 169-162.
- (18) SIMONS, W., op. cit., p. 71; MOLS, R., *Introduction à la démographie historique des villes d'Europe du XIV^e au XV^e siècle*, vol. 2, 1955, pp. 183-199, 218-222, 374-375. 女子人口は雇用機会を求めて都市に向かう。特に都市が大量に需要する未熟練の家内労働は、主に単身女性によって満たされた。
- SIMONS, W., op. cit., p. 10.
- (19) DE KEYZER, W. A., *Aspects de la vie béguinal à Mons aux XIII^e et XIV^e siècles*, in: *Autour de la ville en Hainaut. Mélanges d'archéologie et d'histoire urbaines offerts à Jean Dugnoille et à René Sansen*, 1986, pp. 205-206. 諸立者不明がはかばか二六館あり。
- (20) SIMONS, op. cit., pp. 73-4. 市外出身者に触れた個別研究には以上のものがあつた。
- DEGLER-SPENGLER, B., *Die Beginen in Basel*, in: *Basler Zeitschrift für Geschichte und Altertumskunde*, 69 (1969), pp. 5-83; 70 (1970), pp. 29-118. PHILLIPS, D., *The Beguines in Medieval Strassburg*, 1945.
- (21) GREVEN, J., *Die Anfänge der Beginen: Ein Beitrag zur Geschichte der Volksfrömmigkeit des Ordenswesens im Hochmittelalter*, 1912. p. 102; ASEN, J., *Die Beginen in Köln, Annalen des historischen Vereins für den Niederrhein*, III (1927), pp. 92-92; PHILLIPS, D., *Beguines in medieval Strassburg: A study of the social aspect of beguine life*, 1941, pp. 24-28; NEUMANN, E. G., *Rheinisches Beginen- und Begardenwesen: Ein Manzer Beitrag zur religiösen Bewegung am Rhein*, 1960, pp. 105-106; KOORN, F. W. J., *Begijnhoven in Holland en Zeeland gedurende de middeleeuwen*, 1981, pp. 191-192.
- (22) MOLLAT, M., *The Poor in the Middle Ages: an essay in social history*, 1986. (*Les Pauvres au Moyen Âge*, 1978)
- (23) GRUNDMANN, H., *Religiöse Bewegungen im*

- Mittelalter* : Untersuchungen über die geschichtlichen Zusammenhänge zwischen der Ketzeri, den Bettorden und der religiösen Frauenbewegung im 12. und 13. Jahrhundert und über die geschichtlichen Grundlagen der deutschen Mystik, 1935, 1970, pp. 170-354; Id., Deutsche Mystik, Beginentum und Ketzeri des "Freien Geistes": Neue Beiträge zur Geschichte der religiösen Bewegungen im Mittelalter, in: *Archiv für Kulturgeschichte* 37 (1955), p. 176.
- (24) GRUNDMANN, Religiöse Bewegungen, 1970, p. 351.
- (25) Id. op. cit., p. 319.
- (26) McDONNELL, op. cit., NEUMANN, E. G., op. cit.
- (27) ELM, K., Ketzer oder fromme Frauen? in: *Journal für Geschichte* 2 (1980), pp. 42-46.
- (28) Id. op. cit., p. 44.
- (29) Id. op. cit., ibid.,
- (30) FREED, J. R., Urban Development and the 'Cura Monialium' in Thirteenth-Century Germany, in: *Viator* 3 (1972), pp. 311-27; STEIN, F. M., *The religious women of Cologne : 1200-1320*. Diss. phil. Yale University 1977, pp. 238-9.
- (31) GRUNDMANN, H., *Religiöse Bewegungen im MA*, 1970, p. 187.
- (32) NEUMANN, E. G., op. cit., pp. 72-3.
- (33) ヴェンハンの状況について 拙稿「近代以降のヴェンハフ——脱キリスト教化の過程とキリストの花嫁ナヤ——」『「橋研究」第一七巻四号（一九九三年一四）』一ページ ヴェンハフ超越について PHILIPPEN, L. J. M., *De Begijnhoven : Oorsprong, geschiedenis, Inrichting*, 1918. Id., *Het ontstaan der begijnhoven, een synthetische studie*, 1943. KOORN, F., *Begijnhoven in Holland en Zeeland gedurende de middeleeuwen*, 1981, せきぎの文庫なやな 幾の幾をナヤナ。ナヤナ幾のナヤナ *Werken & Kerken : 750 jaar begijnhoven te gent, tentoonstelling catalog*, 1984. 糸米文庫田藤に館やなやな。
- (34) PHILIPPEN, L. J. M., *Het Ontstaan der Begijnhoven*, 1943, p. 49.
- (35) PHILIPPEN, L. J. M., *De Begijnhoven*, 1918, p. 157, pp. 169-171.
- (36) 田藤 PHILIPPEN, L. J. M., op. cit., pp. 140-141.
- (37) 幾娘女の田藤について いいて幾の幾の幾

はないであろう。レジヌ・ヘルヌー著、福本秀子訳

『中世を生きぬく女たち』白水社、一九八八年 (PER-

NOD, R., *La femme au temps des Cathédrales*,

1980) 四二一四六頁、マイリー・ン・ン・ン著、M. M.

ボスタン編集、中森義宗・安倍泰子訳『中世の女たち』

思案社、一九七七年 (POWER, E., *Medieval Women*,

ed. by M. M. POSTAN, 1975), PARISSE, M., *Les*

nommes au Moyen Âge, 1983, pp. 147-154.

(38) ベギンの生活維持手段について、PHILIPPEN,

L. J. M., op. cit., pp. 201-207.

(39) APPELO VAN PASSEN, D., *Het ontstaan van*

de begijnhoven en de betekenis van het woord begijn,

Doctorale verhandeling V. U. Amsterdam 1974, pp.

9-10.

(40) ちしあたり、DUBY, G., *Les trois ordres ou*

l'imaginaire du féodalisme, 1978.

(41) マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテス

タンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、一

九八九年改訂、一〇〇頁。(WEBER, M., *Die Protes-*

tantische Ethik und der «Geist» des Kapitalismus,

1920.)

(42) マックス・ヴェーバー前掲書、九六頁。

(43) ヴィエヌス公会議については、ちしあたりフーベ

ルト・イエディン著、出崎澄男、梅津尚志共訳、『キリ

スト教会公会議史』エンデル・書店、一九六七年、一

一〇〇一八頁。(JEDIN, H., *Kleine Konzilienges-*

chichte, 1966) LERNER, R., op. cit., p. 47 ff., LE-

CLER, S. J. J., *Vienne*, pp. 159-160.

(一橋大学大学院博士課程)